

# 目 次

はじめに .....	1
平和学習広島・長崎派遣プログラム概要 .....	2
事前学習 1 日目 .....	3
事前学習 2 日目 .....	4
平和学習広島派遣プログラム行程 .....	5
平和学習長崎派遣プログラム行程 .....	7
派遣者報告 (A 班：広島) .....	10
派遣者報告 (B 班：広島) .....	18
派遣者報告 (C 班：広島) .....	26
派遣者報告 (D 班：長崎) .....	34
派遣者報告 (E 班：長崎) .....	42
派遣者報告 (F 班：長崎) .....	50
藤沢市平和の輪をひろげる実行委員会引率者感想 .....	58
記録写真集 .....	59

## はじめに

藤沢市は、1982年（昭和57年）に「藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言」、1995年（平成7年）に「藤沢市核兵器廃絶平和推進の基本に関する条例」を制定し、核兵器の廃絶、恒久平和の実現に向けて、公募市民で構成する「平和の輪をひろげる実行委員会」と協働で、さまざまな平和事業を進めております。

未来を担う児童・生徒を対象に実施する平和学習事業は、1987年（昭和62年）、広島市に小中学生を派遣する「平和ツアー」として始まりました。2002年（平成14年）からは、訪問先を長崎市とした「平和学習・長崎派遣事業」となり、2011年（平成23年）からは、「親子記者・広島派遣事業」を加え、被爆地を訪問し、被爆の実相や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学ぶ機会として実施してまいりました。

今年度は、「平和学習広島・長崎派遣プログラム」として再編し、参加者が主体的に被爆者をはじめ継承に取り組む様々な人々から話を聞き、学び、知ったことを伝える体験型プログラムとして、広島・長崎に36人の青少年を派遣しました。

派遣者のみなさんは、広島・長崎への派遣を通じて、多くのことを学んできたことと思います。被爆者をはじめ、多くの戦争体験者が高齢化している現状を鑑みると、私たちは知るだけでなく、知ったことをより多くの人に伝えていかねばなりません。

今後も、この地球上からすべての核兵器をなくし、子どもたちの笑顔があふれる安心で平和な世界の実現に向け、市民の皆様とともに「平和の輪」をひろげる取組を行ってまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

藤沢市長 鈴木恒夫

## 平和学習広島・長崎派遣プログラムについて

令和5年度の平和学習広島・長崎派遣プログラムでは、広島と長崎にそれぞれ18人ずつ計36人の青少年を派遣しました。

被爆地での学びをより深めるため、派遣前に2日間の日程で、事前学習を実施し、原爆の基礎や被害の実態等を学んだほか、被爆地を訪れることの意義を改めて考える機会としました。

広島派遣については、被爆の実相を学ぶとともに、戦前の広島の賑わいから、戦後の復興までを学ぶ本市独自のプログラムとして、「記憶の解凍」ARアプリを使った旧中島地区（広島平和記念公園）のフィールドワークや被爆体験講話、被爆電車の乗車体験等を実施しました。

長崎派遣については、平和案内人による被爆遺構のフィールドワークや長崎市が主催する青少年ピースフォーラムに参加し、被爆体験講話を聞いたり、全国の青少年との交流や意見交換を通じて被爆の実相を学びました。

派遣後については、8月26日（土）に「第7回平和の輪をひろげるつどい」の中で、「平和学習広島・長崎派遣プログラム報告」として各班が学んで来たことを発表するとともに、11月18日（土）から27日（月）までの期間に、「平和学習広島・長崎派遣プログラム報告展」として、この冊子にある派遣者報告を市役所本庁舎1階に展示しました。

### ○ 藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言

昭和57年6月22日

告示第29号

わが国は世界で唯一の核被爆国であり、核兵器廃絶と恒久平和の実現は全国民共通の願いである。

しかし、すでに地球上には多くの核兵器が貯えられ、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

藤沢市は、日本国憲法の本質に基づく国の平和と安全こそが、地方自治の根本的条件であることにかんがみ、非核三原則が完全に実施されることを願い、核兵器の廃絶と軍縮を全世界に訴え、この人類共通の大義に向かつて不断の努力を続ける核兵器廃絶の平和都市であることを宣言する。

## 事前学習 1 日目

場所：F プレイス ホール・会議室

日程：2023年（令和5年）7月8日（土）

### 講演「記憶の解凍」

～戦争体験者の「想い・記憶」を未来へ継承するために～

講師：東京大学学生 庭田 杏珠さん

AI 技術と資料・当事者との対話をもとに、戦前から戦後の白黒写真をカラー化し、「記憶の色」をよみがえらせる「記憶の解凍」。講師が高校時代から取り組む戦争体験者の「想い・記憶」の新しい継承の取組から、被爆地派遣の意義について考えました。

### 「平和学習・長崎派遣事業に参加して」

（平和の輪をひろげる実行委員会 米田委員）

昨年度「平和学習・長崎派遣事業」に参加し、今年度から平和の輪をひろげる実行委員となった米田委員から、派遣参加に向けた事前準備や、心構えについて学びました。

### 「原爆について」

（平和の輪をひろげる実行委員会 山崎委員）

原爆に関する基礎知識として、当時の社会情勢や、原爆投下による被害等を学びました。また、沖縄県の中学生の朗読動画「生きる」を視聴し、改めて平和の尊さを確認しました。

## ユースリーダー 研修 1 日目

### 「被爆者の思いを伝えよう～記者から学ぶ聴き方、伝え方」

（株式会社タウンニュース社記者 加藤 裕人さん）

実際に記者をされている方を講師に被爆地で見たことや聞いたこと、感じたことをわかりやすく伝えるための手法を学びました。

## 事前学習2日目

場所：藤沢市役所本庁舎 会議室

日程：2023年(令和5年)7月29日(土)

### メッセージ作成

(平和の輪をひろげる実行委員会 益子委員)

広島・長崎それぞれの被爆地において読み上げをする、平和に関するメッセージを作成しました。今年度は、派遣地ごとに各班が分かれて、それぞれ過去・現在・未来をテーマにメッセージを考え、その後全体で意見を出し合いながら、完成させました。

### 班別ミーティング

班別に分かれ、自由行動のプランニングや、報告会のテーマ設定を行いました。

### 「未来を創る 平和の輪」

(平和の輪をひろげる実行委員会 長澤委員)

核兵器を取り巻く社会や国際情勢について説明を受け、平和に対する多角的な視点を持つことの重要性について学びました。

## ユースリーダー 研修2日目

「What is Peace? From the perspective of the country at war. (平和とは何か 戦時下の国の視点から)」

(Daryna Kukhar (ダリナ・クカー) さん)

ロシアによる侵攻で、多くの人々が犠牲となっているウクライナから日本に避難している大学生を講師に、前半は戦時下の国の視点から、改めて平和とは何かについて話をしてもらい、後半は意見交換をしました。










# 平和学習広島派遣プログラム行程

2023年(令和5年)8月5日(土)～7日(月)

1 日目

8月5日(土)






- ・江波車庫での被爆電車見学(講師:加藤 一考さん)
- ・原爆ドーム(平和記念公園)、平和記念資料館見学
- ◎平和メッセージの読み上げ(原爆の子の像)

新横浜駅 =  = 広島駅 =  = 江波 =  = 江波車庫見学 =  =  
江波 =  = 原爆ドーム =  = 原爆の子の像 =  = ホテル(泊)

2 日目

8月6日(日)

- ・広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式
- ・「記憶の解凍」ARアプリ  
旧中島地区フィールドワーク(講師:庭田 杏珠さん)
- ・班別自由行動

ホテル =  = 平和記念公園(平和記念式典、旧中島地区フィールドワーク)  
=  = ホテル =  = 班別自由行動 =  = 原爆ドーム前(元安川とうろう  
流し) =  = ホテル

3 日目

8月7日(月)

- ・講演「被爆電車からみる広島のように」(講師:加藤 一孝さん)
- ・被爆体験講話「三度許すまじ原爆を」(講師:梶矢 文昭さん)
- ・被爆電車乗車体験

ホテル =  = 広島国際会議場 =  = 原爆ドーム前 =  = 広島港 =   
= 広島駅 =  = 新横浜駅

## 講師紹介

**庭田 杏珠さん**：2001年（平成13年）広島県生まれ。AIと資料・戦争体験者との対話をもとに、原爆投下前の白黒写真をカラー化し、「記憶の色」をよみがえらせる「記憶の解凍」に高校時代から取り組む。

**加藤 一孝さん**：1949年（昭和24年）広島生まれ。高校教員を経て1980年（昭和55年）広島市こども文化科学館。元館長。現在、日本路面電車同好会中国支部代表、広島国際学院大学評議員、比治山大学講師等。

**梶矢 文昭さん**：1939年（昭和14年）広島市生まれ。小学1年生のときに広島駅近くで被爆。1962年（昭和37年）から広島市で小学校教諭や校長を務める。2001年（平成13年）に「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を発足し、事務局長に就く。令和に入ってから、財団法人広島平和文化センターの被爆体験証言者として「三度許すまじ」を伝える活動を行っている。

### ◎平和学習広島派遣プログラム 平和メッセージ文

想像できますか？

人々の生活を戦争が一瞬にして奪ったことを。

人間が生み出した核兵器によって、人間を暗黒へと導いています。

何気ない日常を願った多くの命が広島に眠っています。

平和とは、思いやりのある社会のことです。

しかし、世界では今、たくさんの国が戦争をしています。

平和な社会を作るためには、まず、一人一人が世界で何が起きているのかを学ぼうとすることが大切です。

平和が脅かされる今だからこそ、他人事になっている戦争という過ちを二度と繰り返さないことが必要です。そのためには、恐怖を忘れずに未来へと語り継ぎ、社会に興味を持ちつつ、周りの人を大切にするなど、身近なことから変えていくことが平和への一歩へ繋がるのではないのでしょうか。

※このメッセージは7月29日（土）の事前学習で参加者が作成し、8月5日（土）に原爆の子の像で読み上げました。

# 平和学習長崎派遣プログラム行程




2023年（令和5年）8月7日（月）～10日（木）

1

日目

8月7日（月）

- ・城山小学校（被爆校舎）見学
- ◎平和メッセージの読み上げ（原爆落下中心地公園）



藤沢市役所 =  = 羽田空港 =  = 長崎空港 =  = 城山小学校 =  = 原爆落下中心地公園 =  = ホテル（泊）

2

日目

8月8日（火）

- ・平和案内人との被爆遺構や原爆資料館フィールドワーク
- ・青少年ピースフォーラム（被爆体験講話、ワーク等）  
被爆体験講話（講師：築城 昭平さん）

ホテル =  = 被爆遺構 = 原爆資料館（青少年ピースフォーラム）  
=  = ホテル（泊）

3

日目

8月9日（水）

- ・被爆78周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典のオンライン視聴
- ・報告会準備やワーク





ホテル内で学習 ※台風の影響で式典やピースフォーラム2日目の参加ができなかったため

4

日目

8月10日（木）

- ・稲佐山（バス車内から見学）、市内見学

ホテル =  = 稲佐山・市内 =  = 長崎空港 =  = 羽田空港 =  = 藤沢市役所



## 講師紹介

**築城 昭平さん**：当時長崎師範学校在学中。（18歳）軍需工場へ学徒動員され、爆心地から1.8kmの学校の寮で、当日の夜勤にそなえ睡眠中に被爆。全身火傷を負う。特に左腕と左足先は重傷だった。

### ◎平和学習長崎派遣プログラム 平和メッセージ文

1945年8月9日11時02分。

原爆が落とされて、人々の生活が壊れ、多くの人の命が失われました。

しかし、敗戦をきっかけに、平和の基盤となる言論・思想の自由が保障されました。

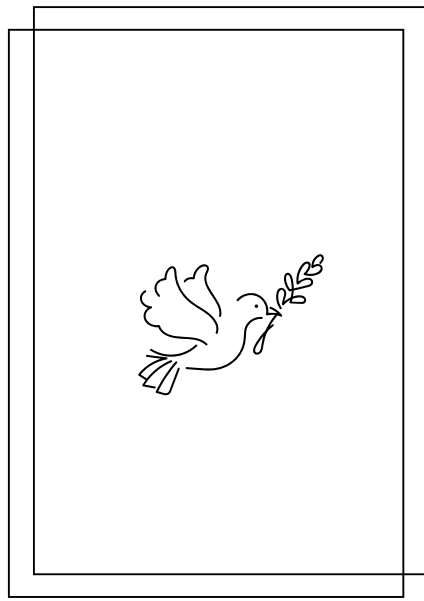
現在、世界には、平和とはいえない国があります。

自分が平和と感じていても、一瞬で大切な人がいる幸せや、いつも通りの日常を奪われている人がいます。

今、戦争経験者の高齢化が進み、語り手が少なくなっていく中で、私たちは、「知る」世代から「知って伝える」世代へ変わらなければなりません。

過去の残酷な出来事を次の世代へ語り継ぎ、人とのつながり、当たり前の日々への感謝を育み、平和で明るい未来をつくっていきましょう。

※このメッセージは7月29日（土）の事前学習で参加者が作成し、8月7日（月）に原爆落下中心地公園で読み上げをしました。



## A 班

ユースリーダー 岡田 里菜  
土橋 朋実  
岩根 哲成  
舟木 花凜  
高橋 一步希  
唐川 萌衣



# 広島派遣を終えて

慶應義塾大学1年 岡田 里菜  
(ユースリーダー)

原爆はその凄まじい破壊力という観点から語られることが多いが、今回の広島派遣では、人への被害に着目して平和学習を進めることができた。例えば、被爆体験証言者である梶矢文昭さんから、私たちはきのこ雲の下の惨状を聞いた。被爆当時の梶矢さんは、小学1年生。崩れ落ちた建物の柱の間をかいぐり、「逃げなかったら焼け死ぬ」という一心で火の海となった街を駆けたという。しかし、やっとの思いで見つけたのは、動かなくなった姉と、その遺体の前で呻く血まみれの母親だった。

梶矢さんのお話を聞いた後、私は自分が小学1年生だった頃を思い返してみた。頭に浮かんだのは家族や友達との楽しい思い出ばかりで、辛いことといえば、校庭で転んだことくらい。梶矢さんの体験との差に、私は改めて平和の尊さを痛感した。また、世界には今も戦禍を生きる子どもたちがいるという事実に対して、強い憤りを覚えた。どうすれば子どもたちが平和に暮らせる社会を構築できるのか。この問いに対する答えを探すために、今後はより一層勉学に励みたいと思う。

また、今回の平和学習広島派遣プログラムは、私にとって初めてのグループ指導員としての経験であった。そのため、派遣前は自分がユースリーダーを上手く務めることができるかを不安に感じていた。しかし、勉強熱心で心優しい班員たちのおかげで、とても楽しくユースリーダーの役目を全うすることができた。

また、班員たちが現地で被爆の実相と真摯に向き合う姿からは、私も学ぶことがたくさんあった。特に、彼らの質問やコメントの端々から感じられる広い視野と鋭い洞察力には、感心させられることが多かった。私は前に広島を訪れたことがあったが、今回は班員との交流を通して、原爆や平和に関する新たな発見に出会うことができた。この度は、本プログラムにユースリーダーとして携わることができたことを嬉しく思う。

# 平和な世界をつくるために

慶應義塾湘南藤沢高等部 1 年 土橋 朋実

「本当にこの土地に原爆が落ちたのだ」原爆ドームを見た瞬間、初めて実感が湧きました。今までは、一瞬にして人々の営みと共に街が消え去るということ想像するのは難しかったのですが、語り部の方の話を伺ったり平和記念資料館で遺物や手紙、写真を見たり、ARで今は道になっている場所がかつては人々で賑わっていたお店だったことを知るなど、学習を重ねるたびに元の街の雰囲気や輪郭が少しずつ鮮明になってゆく感覚がありました。そして、それと共に原爆や戦争の重み、暗さを痛感しました。梶矢さんがふと言われた「原爆だけじゃやない。戦争はほんとに酷いもんだ。」という言葉に戦争の残忍さやどのような思いで梶矢さんが語っているのかが分かった気がしました。

聖書には「与えなさい。そうすれば自分も与えられます。」という言葉があります。この世界は資源や土地、地球というこの星などどのような面から見ても全てが有限です。そこに価値をおき、争いが生まれることは必然なのかもしれません。しかし、その中で互いに与え合うことができるような世界こそが本当に平和な世界だと言えるのではないのでしょうか。

その第一歩として私も世界で起きたこと、起きていることに意識を傾け、平和という今はまだ誰もが答えを知らない抽象的な言葉の意味を考え続けていきます。また、お盆に祖父母の家に訪れた際に祖父から戦争の体験談を聞きました。今までは祖父は戦争を経験していないと思っていましたが、私がこの活動に参加した話をすると祖父が話してくれました。改めて歴史で習った土地だけではなく日本中が戦火の中にいたのだと感じました。そして、繋ぐ世代として戦争のない未来を残すために自分の目や足で世界を知っていきます。

# 世界と比べて考えたこと

逗子開成中学校 3年 岩根 哲成

今まで自分は原子爆弾について熟知しているつもりでしたが、今回の広島派遣プログラムでは多くのことを学びました。特に驚いたことは原爆が落ちた後「初期放射線」が放出されて、さらに「残留放射線」が地上に残るということです。被爆していない人が救護に向かい被爆してしまったということに非常に理不尽だと思いました。また、平和記念資料館で、やけどで皮膚が垂れている少年の写真や、元安川で被爆者が多く倒れ死んでいた様子の絵をみて、ひとつの原爆がもたらす威力と被害について十分に理解することができました。そして庭田杏珠さんの「記憶の解凍アプリ」を使ったフィールドワークに参加した際に、原爆が落とされ最後の家族写真になってしまった人のことを聞いて、原爆が落とされたときの広島の人々は現代の自分と同じように当たり前で生活していたことに気がつきました。

つまり、核兵器が存在しているかぎり、自分の生活もいつ核兵器によって奪われてもおかしくない、ということだと思いました。そのため僕は自分の家族や友人の大切さを実感しました。このように、大切な人の存在を理解し感謝することが平和への第1歩であり、これを続けることで戦争や核兵器が「お互いのかけがえのない存在や日常を奪うことだ」と国の指導者に伝えることができると思いました。また、文化や考えが違うため衝突し武力で解決しようとするをやめ、じゃんけんなどで穏やかに解決することを提案したいです。1発勝負で争いにつながることはありません。

「3度目は人類があぶない」と梶矢さんが言っていたように、世界の今の核兵器の意識では人類滅亡は起こってもおかしくないです。戦後78年が経ち、無惨な出来事が風化されそうな中、世界のたった1つの被爆国である日本がすべきことは「思いやり」という文化を伝えることです。僕たちにできることとしては、被爆された方々の思いを受け継ぎ海外や若い世代に伝えることです。

# 「広島から世界へ伝えるべきこと」

慶應義塾湘南藤沢中等部 1年 舟木 花凜

私が広島平和学習に参加した理由は、被爆者からのお話を直接伺える機会が少なくなっている今、自分が原爆当時の話を聞いて、継承していきたいと思ったからです。

このプログラムではいろいろな体験をし、たくさんのことを学びましたが、一番印象に残っているのは「記憶の解凍」ARアプリフィールドワークです。「記憶の解凍」プロジェクトは庭田杏珠さんが戦前の白黒写真をAIの自動カラー化をした後、写真提供者のお話や資料をもとに実際に即した風景をよみがえらせるものです。

そのカラー化写真を見ることによって、私たちと同じような日常生活が被爆する前にもあって、それが一発の原爆により一瞬でなくなってしまったという実感がわきました。実際に足を運んだ場所は、現在では、びっくりするほど変わっているのですが、アプリのおかげで被爆前の日常生活を感じることができるのです。戦争というものは、今私たちが過ごしている当たり前のような日常が一瞬にして壊されるということを世界中の誰もが知る必要があります。庭田さんが白黒写真のカラー化に取り組んだことに感動し、私にもなにかできることはないのかと考えました。

今後、平和に向けての活動をしていきたいです。私は今後国外で勉強することを目指しているので、広島で学んだことを国内、そして国外の人々へと伝えていきたいという気持ちですが、この平和学習に参加することにより強くなりました。中学生一人の活動などなにも変化を生み出せないと思い込んでしまわずに、自分のできることから一歩踏み出してみることが大切だと思います。

# 平和のためにできること

大越小学校6年 高橋 一步希

平和学習広島派遣プログラムは、「平和」ということについて真剣に考える機会を与えてくれました。広島を訪れる前、「広島原爆」という絵本を読みました。その時の僕は本当の原爆の恐ろしさを想像できていませんでした。でも、人影の石やさびた自転車、被爆電車やケロイドの人の写真などを見て、怖くなりました。原爆が投下された日、これらのすべてが広島に広がっていたかと思うと、僕は言葉にならない気持ちになりました。

平和記念式典には111カ国の代表の人が来ていました。僕は、子ども代表の勝岡さんが話された「原子爆弾は生き延びた人々にも深い傷を負わせ、生きていくことへの苦しみを与え続けたのです」という言葉が印象に残っています。原子爆弾によって多くの人々が亡くなったという過去の事実だけでなく、その後も生きている人々を苦しめているという今があるということを知り、辛い気持ちになりました。そして、誰もが平和を望んでいるのに、どうして今も核兵器が存在しているのか、この矛盾に怒りを覚えました。一人ひとりが平和を願い、平和のために何ができるかを考えて行動しなければならないと強く思いました。

記憶の解凍フィールドワークで、旧中島本町周辺を歩いた時、今は公園になっているところに、当時はお店や家が立ち並んでいる風景が見えました。当時の街は非常に栄えており、みんな幸せだったと聞きました。原爆によって、そんな幸せな日常が奪われることがどれだけ悲しいことか。被爆者の梶矢さんが「3度目は絶対にダメだ」と強く話されていた時、これ以上人が苦しむようなことは起きないで欲しい、僕も心からそう思いました。

今、僕は、家族がいて、普通に学校に通えて、友達と遊べる毎日が幸せなんだと実感しています。いつも平和を願う気持ちを持ち続けること。それは、いつも互いを思いやる気持ちを忘れず、相手の身になって考えられる大人になることだと思います。



# 私達ができること

鵜沼小学校 5年 唐川 萌衣

「たった一つの前爆で、広島町がなくなってしまうなんて・・・。」

私は、初めて平和学習で広島に行き、戦争の恐ろしさ、平和の尊さを改めて感じました。

私が特にそう感じたのは、平和記念資料館での見学と庭田杏珠さんの「記憶の解凍」ARアプリで旧中島地区をまわったことです。

資料館には、原爆が落ちて、人の皮膚とは思えないようなひどい火傷をしたり、放射線を浴びて、病気に苦しむ人たちの写真、焼け焦げた自転車、その時に着ていた破れてボロボロになった洋服などがありました。

フィールドワークでは、今自分が立っているところに、昔は中島地区があったとは、想像もできませんでしたが、アプリを通して、こんな建物があつた、木がたくさん生えてるところにいくつかのお店があつたりなど、中島地区に暮らしていた方々の何気ない、幸せな日常があつた事を知ることが出来ました。

原爆で多くの人々の命が失われ、その何気ない、幸せな日常をたった一瞬で奪った戦争は、二度としてはいけないと強く思いました。また、戦争が終わつた後も、放射能を浴びて病気で苦しんだり自分の体にできる傷もあれば、友人や家族を失つた悲しみなど、心にできる傷もあると感じました。

戦争の体験をしている方々も高齢になっていき、話を聞くことができる貴重な機会も減ってきています。平和学習を通して、私が学んだことは、戦争を体験していない私たちが、今回の平和学習での学びをより多くの人に伝えていかなくてはならないという事です。まだ、たくさんの国で悲しい争いなどが起きていますが、世界が平和になるには、まず一人一人が思いやりを持っていくことが大事だと私は思います。だから、今日からでも世界を平和にする第一歩を進んでいきたいです。



## B班

ユースリーダー 荒井 理紗子  
古山 智  
安部井 唯  
遠藤 悠真  
飯塚 美結  
井上 朔



# 原爆投下時に残された手紙から平和を考える

大東文化大学 2年 荒井 理紗子  
(ユースリーダー)

私は今回、ユースリーダーとして参加しグループで学ぶことの大切さを感じました。小学4年生の時に私は親子記者・広島派遣事業に参加し、広島に行き戦争の残酷さを知り、平和について学びました。今回も再び広島で学びましたが、小学6年生から大学生までの幅広い視野での意見を聞く中で、歳が違えど平和を尊ぶ気持ちはみんな一緒、けれども平和をどう実現するかは人それぞれ違く、色んな形、視点から平和を実現していこうという気持ちを感じました。まずは私達から、色々な方法で平和を実現していけたらと願います。

平和学習で学んだことは、平和記念資料館で、戦争が終わったら就職する会社に提出する履歴書や戦時中にご両親が疎開先の子どもたちへ送った手紙などを見ました。どれも手書きで、履歴書は希望が満ちる堂々とした字で書かれていたり、お父さんの手紙では、優しそうな字だったり文字一つ一つに人柄が溢れていました。戦後78年がたった今、昔の人と言葉遣いも少し違うため、戦争は過去のことと思いがちです。しかし、この手紙を読んだ瞬間ご両親は子どもを大切に思い心配しながら何を伝えようと考えながら手紙を書いたり、履歴書は会社に就職して素敵な大人になるといった夢を抱きながら書いていたり、当時の情景が瞬時に浮かびました。戦後78年が過ぎても、昔と今でも私たちの想いは変わらず、一人一人の夢や希望を描き毎日懸命に生きていた、その生活を原爆が瞬時に奪ってしまったのだと思いました。

今、この一瞬にも色々な国で戦争が起こっています。もう一度、世界中の人々が戦争の悲惨さや残酷さを学び、平和について考えるべきだと思いました。私は今、大学で手書き文化の大切さについて学んでいます。今回の経験を通して、昔も今も言葉で想いを紡ぐこと、それは時が過ぎても色褪せない手書きの大切さを感じました。手書き文化を伝え、自ら平和の伝達者となり、平和を広げていきたいと思っています。

# 自らの目で見た広島

慶應義塾湘南藤沢高等部 1年 古山 智

3年前の私は広島に行ってみたいとは思わなかったと思う。六歳から十二歳までをニューヨークの現地校で過ごした私は、周りのアメリカで生まれ育った友達のように米国側の意見や体験を教える教育を受けてきた。幼少期をアメリカで過ごしたことで大きな視野で物事を見る力を得られたが、日本を中心とした歴史の教育を受けることができなかった。日本に帰国した際に公立中学校に通い、広島や長崎など日本にとって影響力の多い出来事についていろいろと新たな事実を知ることになった。そこから、今まで関心のなかった日本の歴史についてもっと知りたいと強く思うようになった。

広島に行き、原爆の被害を自らの目で見るとは衝撃的だった。今まで教科書や小説で見てきた場所が手で触れられる程の近さにあっても、このような悲劇的なことを本当に人類ができると思えなかった。特に平和記念式典に参加した時は感動を受けた。被爆者を始め、被爆者の家族、全国からの学生、観光客、報道関係者、世界各国からの代表などが集まり、改めて平和について考える姿を見ることで核兵器廃絶はすごく偉い目標でありつつ、達成のため今より一層努力する必要があるのだと心から思った。また、式典が行われた6日の夜、灯籠流しを見に行ったあとに平和記念公園を通った。その際夜になっても絶えない慰霊碑に献花をするために並ぶ老若男女の行列を見た。この行列を見たことで広島原爆投下が日本人々に現在でも忘れられることなく伝えられていると感じた。

私は今回の派遣プログラムに参加して核兵器や平和について考えるきっかけとなった。元々は日常生活からかけ離れたことが広島に実際訪れることで身近なことに感じられるようになった。今回の体験を元に今後は日本を世界とつなげる役割を果たしたい。また、海外に出た際に現地の人々に現在の日本の形成に大きく関係する広島の話ができるようにもっと学習していきたい。

# 何故戦争、核は絶えないのか

藤ヶ岡中学校 2年 安部井 唯

「人を傷つけることはいけないよ。」

小さな子供も習う簡単なことです。ですが何故、世界の戦争は絶えず、依然として核は無くならず残るのか。私はそんな疑問を持って平和学習広島派遣プログラムに臨みました。

私がこの疑問の答えに至るまでに大きく助けとなった出来事は、平和記念資料館見学と平和学習講演でした。

平和記念資料館で私は原爆被害の大きさを目の当たりにしました。本や知識ではその被害を知っているつもりでしたが実際に被爆をした物を見ると腹の底からわきあがる当時の人々の怒り、何が起きたのか分からない戸惑い悲しみが感じられました。何より、被爆した品に名前が残っていた所を見ると、その人にも「生活」があって、それが無慈悲に奪われていったことに頭を打たれたような衝撃を受けました。

平和学習講演では、小学一年生のときに被爆した梶矢さんのお話を聞くことができました。その話を聞く中で梶矢さんの心の中にある大切な姉を亡くしたつらさ、あまりにも悲しい出来事だったから考えなかったという事実を知りました。梶矢さんは核を使ってはいけないということよりも先に、多くの人が苦しみながら目と鼻の先で死ぬのをみたくないということをうたえていました。一般の常識でただ「戦争はいけない。人が死ぬから。」ととなえていた私の考えを「たくさんの人々が苦しむから戦争はしてはいけないことだ。」と考えを改めさせられる出来事でした。

2つの出来事で感じたことは、原爆被害の大きさでした。ですが、その被害の大きさこそ、核が消えない理由だと感じました。普通人々は絶えず便利な道具に頼りますし、それを手放すことはできません。それなら原爆不必要な環境を作るべきです。人々が武力不必要と感じる環境を作ることが大切なのです。

# 広島派遣で感じたこと

鷗沼中学校 1年 遠藤 悠真

僕が平和学習に参加した理由は、広島の子の様子や資料館の展示を見たかった、そして何より被爆者の方の生の声を聞きたかったからです。

平和学習に参加して感じたことは多くありましたが、特に印象に残っているのは、被爆者 梶矢 文昭さんの講演と、その後の対談です。

まずは、被爆者の方の声を聞いて感じたことについてです。梶矢さんは、原爆投下当時、分散授業所で雑巾掛けをしていて、小窓から強い光と木の葉が焼ける様子を見て、その場に伏せて身を守ったといいます。しかし、その時姉は雑巾の水の取り換えで別の場所にいたため、残念ながら亡くなったということです。その後、崩れた建物の下から何とか抜け出し裸足で山の中腹まで逃げたそうです。

そんな梶矢さんが何度も訴えていらっしゃったことが、昨今の核兵器の威力の強さと地下シェルターの必要性についてです。昨今の核兵器には、広島に落とされたものと比べて、千倍ほどの威力があり、一発でも攻撃されれば、とても大きな被害が出てしまうということです。

しかし、そのような兵器への対策をスイスや台湾などの諸外国が行っているのに対し、日本には地下シェルターがなく、もしも攻撃を受けた際に命を守る手段が少ないので、広島や長崎で起きたことが繰り返されてしまうのではないかと心配しているそうです。

数か月前、中国からの圧力を受ける台湾の、中国軍の本土上陸を想定した避難訓練の報道を目にしたことがありました。

一方で、日本ではあれから78年間何も起こらなかったのだから大丈夫だと少し安心していましたが、梶矢さんのお話を聞いて、日本も危ないのだと気づかされました。

はっきりといえるのは、広島には、戦前は多くの人々が暮らしていましたが、たった一発の爆弾によってすべてが壊されてしまったということです。

いま、私たちにできること

それは、周りの身近な人に被爆者の方の記憶を語り継ぎ、戦争の惨禍を二度と繰り返さないことです。

# 広島で学んだこと

本町小学校6年 飯塚 美結

私は、平和学習で、原爆のおそろしさを学びました。平和記念資料館では、より詳しい被害の状況を知りました。とても大きなきのこ雲、ぼろぼろな皮ふや服、カベにささるガラス片。展示されていた物1つ1つが、原爆の悲さんさを物語っていました。ARアプリでは、原爆投下前まであった日常を感じました。お店や温かい家庭など、多くの人々の日常を知りました。この日常を一しゅんでうばったと思うと本当におそろしいです。この時私は、広島の下には、たくさんの方の命が眠っているということを実感しました。

被爆者の方からは、原爆のおそろしさや広島状況を詳しく教えてもらいました。その中で、心に残ったことが2つあります。

1つ目は、山の中腹から見た広島のことです。火の海のようなようだったそうです。この中で、にげられなかった人々が死んでいったと思うと、とても悲しい気持ちになりました。

2つ目は、原爆のい力のことと、今の核兵器のことです。原爆が落とされた半径2kmはほぼ全滅したそうです。こんな広いはん囲が全滅してしまったことにとてもおどろきました。今の核兵器は、この原爆の約千倍のい力があるそうです。そんな原爆が投下されたら、人類の危機だと聞きました。

被爆電車に関する説明では、人々の復興の力を知りました。原爆で脱線した電車を、被爆から3日で動かし、車庫にもどそうとしたそうです。ひどいことがあっても元にもどそうとする人々の力がすごいと思いました。広島は、完全に復興したそうです。しかし、今でも原爆病に苦しむ人がいます。また、人々の心の傷は、いつまでたっても消えません。

私は、こんな悲さんなことがもう二度と起きてほしくありません。ですが最近、色々な国が戦争をしています。今こそ、戦争や平和について考えるときだと思えます。今回私が体験したこと、感じたことを、多くの人に伝えて、原爆のことをもっと知ってほしいです。



# 戦争とは何か

石川小学校6年 井上 朔

小学校五年生の時、『たずねびと（光村図書）』という物語を読みました。そこには「焼けただれた三輪車」、「石段に残る人の影の形」、「原爆供養塔」、「原爆ドーム」など、原爆の被害を表す言葉がたくさん出ていました。僕は、「原爆がまた落ちたら。」と想像したら恐怖を感じました。そして、その時何が起こったのかを、実際に自分の目で見て学びたいと思い平和学習に参加しました。

一番印象に残った見学地は、広島平和記念資料館です。絵、白黒写真や当時の日用品など、たくさんの展示物がありました。その中で、教科書でも見た、『人影の石』が心に強く残りました。その理由は、「原爆が落ちる前には、人が座っていて普通の生活があったんだな」と考えさせられたからです。今まで「原爆＝怖い」と思っていたのが、黒い雨、原爆症や残留放射線なども学ぶことができ、本当の恐怖を感じることができました。

そして、被爆者の梶矢文昭さんの「三度許すまじ原爆を」のお話に胸が痛みました。梶矢さんのお姉さんは、分散授業所での掃除作業中に原爆が落ち、爆風で倒壊した家屋に押しつぶされてしまったそうです。僕は、「何の罪もない人たちが、なぜこんなにひどい目に遭わなくてはならないんだ。」と話を聴きながら心の中に強い怒りを感じました。そして、実際に見たことや聞いたこと、学んだことを伝えていく大切さを強く感じました。

最後に、広島県湯崎知事の話も、強く胸に突き刺さりました。核抑止論者を問い質す強い言葉や、「核兵器は、存在する限り人類滅亡の可能性をはらんでいる、というのがまぎれもない現実です。」という言葉も強い説得力をもっていました。今回の平和学習で学んだ「平和とは、今このいつも通りの日常であり、戦争とは、その日常を壊すことだ」ということを家族や親せき、友達や身近な人たちに伝え、平和の輪を広げたいと思います。



## C 班

ユースリーダー 川口 真依  
上田 日菜乃  
藤本 紗良  
山本 美桜子  
藤川 篤都  
前田 瑠衣



# グループ指導員としての感想及び 平和学習で学んだこと

多摩大学3年 川口 真依  
(ユースリーダー)

私が平和学習を通して学んだことは、私たちのように戦争を経験していない世代の人がどうやって後世に伝えていくのかということだ。被爆者がお歳を召されて亡くなっていく中で話を聞くことが出来る最後の世代とも言われる私たちがどう伝えていくのか、これが重要なことだと感じた。今回被爆者から直接、お話を聞く機会をいただいた。原子爆弾が投下させた時の様子やその後の街の様子などを詳しく話していただいた。こうして聞いた内容を友達、家族、ひとりでも多くの人に伝えていくことが大切だ。

今では戦争に関心のない人や原子爆弾を投下された日付を知らない人もいる。そんな多くの人たちに戦争の恐ろしさ、原子爆弾の恐ろしさを伝えることを私たちはやっていかなければならないと思う。

今回、私はユースリーダーとしてこの平和学習広島派遣プログラムに参加した。学校のゼミナールと講義の中で戦争について、戦前の様子などについて学んでいることもあり関心を持った。このプログラムには同じように戦争について関心を持つ小学生や中学生など普段関わることのない学年の子どもたちと共に意見を交換することによって新しい発見を得られるなど自分自身の成長にも繋がったと感じた。

今回参加するにあたって自分の目で原爆ドームや平和記念資料館などを見て戦争について考えるとともに他の班のユースリーダーと協力して円滑にプログラムを進めていけるようにするという目標を立てて臨んだ。その目標どおり同じホテルの部屋になったユースリーダーの人と毎日プログラムの終わりにここはこうすると良いのではないかという改善点や当日の反省をするなど意見を交わし、その反省をもとに実践することも出来た。なかなか年齢も異なる子どもたちをまとめていくことは大変ではあったが良い経験が出来た。

# 大人の喧嘩を止めるには

横浜国際高校 2年 上田 日菜乃

広島に行き、思いついた疑問がこのタイトルだ。広島資料館は長崎に比べて子どもの遺品を多く展示している印象が強かったことがこの疑問を生んだ大きな要因だと考える。遺品は、熱によって溶けてしまった三輪車、おかずが焦げて固まったお弁当、血がべっとり付いた子供用の軍服などだ。日常生活で使うものから、戦争時のものまで様々であった。

戦争は簡単に言えば、「大人たちの喧嘩」である。それに巻き込まれた子どもたちが数え切れないほどいる。彼らは戦争という本来の意味も分からず大人と共に戦っていたのかもしれない。広島と長崎で原爆の威力の大きさだけでなく戦争がどれほど恐ろしくやっちはいけないものだと学習したはずなのに、世界ではそのようなことを無視して戦争が多く発生しているのだ。この前のG7では参加した国の首脳が揃って平和記念公園に献花していたのは、平和の大切さを広げる一つのきっかけとなるものだと考えるが、参加国の中では核兵器を保持し、核抑止論を重んじていた。この現状は各首脳が平和について語る内容と矛盾している。宣言するだけでなく行動を起こすことがとても重要だと考える。

戦争の恐ろしさ、残酷さを直接体験し、それを知らない世代に伝えていく人が少なくなっている今において、戦争についての知識がある我々は文字のみでの学習を終え、体験することが必要になると考える。つまり、直接自分の足を使うことである。今回の派遣プログラムであったり、歩きながらタブレットによる昔の街の様子が現在では何に生まれ変わっているのか分かる地図と融合したアプリが有効であると強く感じる。

大人は戦争の恐ろしさを理解しているようでしていない。いつどこで子どもを巻き込むような戦争が起きてもおかしくない今を生きている我々にできることは足を運び、学習したことを報告し悲惨なものを生ませないことであると今回の派遣で学習した。

# 運命の分かれ道

慶應義塾湘南藤沢中等部 1年 藤本 紗良

私はこの、広島派遣プログラムを通して「運命」についてたくさんの事を考えました。そのきっかけが、広島に原子爆弾が落とされた理由が、当時たまたま広島が晴れていたからと聞いた事でした。もし広島がその日曇っていたら？命中位置が少しでもズれていたら？原子爆弾が落とされるのが一秒でも遅かったら？失われた命が失われていなかったり、その逆になっていたかもしれません。そんなに大きな話でなくとも、もし、ボードゲームでサイコロの目が一つでも違ったら、勝敗も全く違ったのかもしれない。

私は、死ぬ事が怖いです。もう二度と地上に戻ってくる事は出来ないし、何も感じる事が出来ない事を想像するととても怖くなって泣きそうになってしまうこともあります。でも、生物はいずれ死ぬ運命にあり、それを覆すことはほぼ不可能といえます。それなら、生まれてきて、生きてこられた事への感謝や楽しさ等の思いを胸に生きていくことが幸せなのではないでしょうか。

この世には、進路を決めるといった、自らの選択で選べる運命も、サイコロの目のように、選べない運命も存在します。選べない運命が例え不運だったとしても、私達はそれに逆らう事ができません。しかし、だからこそ、今の楽しい事や幸せを大切にすれば、人生は最高のものになると思います。例えば、今学校に友達と楽しく通えている事、食事を不自由なくとれること、家族が健康でいることなどです。広島、長崎に原子爆弾が落とされ、たくさんの命が失われた事の正当化は絶対にできません。

しかし未来へ向けて生きる私達は日本が戦力を捨て、核廃絶を訴える意思を持っています。皆さんも私も今、日本もいつまた、戦争に関わらざるを得なくなる時が来るか分かりません。だからこそ、運命も努力も含めて、今の人生を存分に楽しんで過ごしたいと感じています。

# 広島で感じた事

慶應義塾湘南藤沢中等部 1年 山本 美桜子

私は、今回実際に広島へ行って見て、街全体で「平和」への努力をしているなと思いました。お会いした全ての方々には強いパワーと意志があるように感じました。特に、被爆者の方々は、こちらがお話を聞いているだけで、「原爆や戦争は良くない」と心から思う程、相手にまで伝わる強い意志をお持ちだと感じました。街には、原爆関係の石碑や、原爆を連想させる建築物がいくつか残っていて、その地にあった歴史を後世に伝えようとする広島の人々の思いを伺うことができました。

また、私は「平和」への努力の他に、「復興」のすごさを感じました。正直、広島は被爆したとは思えない程、きれいですてきな場所でした。平和記念資料館で見た、被爆直後の写真とは全く違う風景に、すごい復興力だと気付かされました。やはり、そこには人々の「生きたい」という気持ちがあったからなのではないかと考えます。人は、強い意志と協力があれば大きな波を乗り越えられるという事を、実感する事が出来ました。

今回、私はこのプログラムの中で、様々な体験をしました。その中でも、特に印象に残っているのが、平和記念資料館と被爆者講話です。資料館では、実際に被爆した人々の様子や遺品が展示されていて、印象深く頭の中に残りました。「実際にこんな事が今後起こったら」と思うと、恐怖の気持ちでいっぱいになってしまいました。被爆者講話は、「実際に被爆した人が自分の目の前にいる」と思うだけで一気に話が頭に入ってきて、印象に残りました。

現在、世界には数えきれない程の核兵器があり、「核抑止」という考え方があります。しかし、私はやはり核兵器はあってはならないと思います。これからは、もっと平和に関心を持ち、核の無い世界にしていきたいです。

# 私たちの世代が伝えられること

羽鳥小学校 6年 藤川 篤都

私がこの広島派遣事業に参加しようと思ったきっかけは二つあります。

一つ目はG7広島サミットでテレビ画面越しに見ていた原爆ドームを、自分の目で観ることです。原爆ドームからは原爆の被害の大きさとおそろしさを感じ、それが今にも壊れようとしていることに、不安をいただきました。平和記念資料館は、心に突き刺さってくるようなおそろしい内容のものでした。びりびりになった服や黒い三輪車、黒くこげたお弁当。どれも「広島」という地に一つ一つの命がたくさんあり、その命が一つの爆弾によってうばわれたということがすぐに感じ取れました。

旧中島地区フィールドワークでは、カラー化された当時の中島地区の写真を観ることで、ここには私たちと変わらない日常があったことを感じられました。地面から当時の人々の声が聴こえてくるような気がしました。私が資料館でおそろしさを感じたように、原爆投下後から学ぶとこわさやおそろしさが先立ち、学びを止めてしまう人がいると思います。

二つ目は、二年前に読んだ米澤鐵志さんの「ぼくは満員電車で原爆を浴びた～11歳の少年が生きぬいたヒロシマ～」に出てくる被爆電車に乗ることです。今の路面電車は通勤・通学、観光等の様々な人が乗り、にぎわっています。当時も様々な目的の人々が乗っていた満員電車。原爆が落とされるなんて想像もつかなかったと思います。電車内での梶矢さんのお話から、原爆は身体のダメージだけでなく、『たまたま生き残った』人の心にもダメージを与えるということを感じました。

被爆者の減っている中、戦争を体験していない世代の人も、多くの人々に戦争や原爆について伝えていたことが印象に残っています。資料館で観た写真と庭田さんの写真を比べると感じるものも大きく違い、写真の力は大きいと感じました。私も広島でとった写真を通して、まずは家族や友達からこの体験を伝えていこうと思います。



# 戦争、原爆の恐怖

大清水小学校 6年 前田 瑠衣

僕が平和学習広島派遣プログラムに参加したいと思った理由は、原爆や戦争の恐ろしさを知って勉強したかったからです。そして実際僕が平和学習広島派遣プログラムに参加して1番に感じた事は恐怖です。原爆ドームや平和記念資料館を自分の目で見て、同じ日本でこんな悲惨な事が本当に起こった事が信じられませんでした。焼け焦げてボロボロになった洋服や被爆した人の写真など展示してあり、すごく悲惨だったしもし自分が経験していたらどんなに恐ろしいだろうと思いました。

慰霊祭では、もう二度と同じ事が起こりませんようにと強く祈りました。

他にも袋町小学校に行き、原爆で吹き飛ばされた壁や当時のまま残されている黒板なども見ました。僕も小学校に通っているのでもし学校の近くに原爆が落ちたらと思うとすごく怖いです。

この平和学習プログラムに行く前は学校で勉強した原爆、戦争の知識しか無かったので、プログラムで実際に被爆された方のお話を聞いたり自分の目でいろいろな物を実際に見たら想像以上に残酷で悲惨でショックを受けました。

絶対に忘れてはいけないと思ったし、日本人だけじゃなく世界中の人にも日本でこういう事があったと知って欲しいです。そして周りの人にも伝えていってほしいです。

いろいろな所ですごく怖いと思いました。このプログラムに参加できていなかったらこの経験もできなかつたし、戦争や原爆について深く考えるキッカケになったのですごくいい経験ができました。そして今後も勉強していきたいと思ったし、この経験を活かして僕も周りの友達や家族に戦争や原爆の恐ろしさを伝えていきたいと思いました。

そしてまたこのプログラムに中学生になっても参加したいと思いました。広島で美味しい広島焼きを食べたり、街を歩いたりして僕は広島がすごく好きになりました。平和学習広島派遣プログラムに参加させてもらいありがとうございました。



## D 班

ユースリーダー	中居	栞愛
	玉木	敦
	小田	紗穂子
	渡邊	怜奈
	山本	美風
	和田	菜々香



# 長崎研修を通して

慶應義塾大学1年 中居 栞愛  
(ユースリーダー)

私は今回、初めて本プログラムに参加させていただいたのですが、この4日間での学びが多く、自分自身の平和学習に対する転換点となる機会であったと感じています。

私はこれまで、戦争というものを学ぶ時に、どこか遠くで行われていたものだと、身近にその恐怖や残酷さなどを感じることができていませんでした。学んだ後、「今は平和だしな。」そんな言葉が毎回頭をよぎっていたように感じます。しかし、実際に長崎へと赴き、今もその当時の方達の思いを引き継ぎ、後世に語る平和案内人の方々や、声を上げることはできずとも静かに平和を訴える資料館の展示物の数々、慰霊に集まる方々を目の当たりにすることで、戦争に対する無知、強いては平和に対する意識の低さを痛感させられました。また、これから先、語り継ぐ方々が減っていけば、一体誰が同じような熱量を持って、後世へと語り継いでいくことができるのだろうかという強い危機感も感じました。これからを担う世代の一人として、何ができるのか、自分なりに平和というものに向けて、一歩ずつ踏み出していきたいです。

また、ユースリーダーに関しても、前例がない中、どのようなことができるのか、班の中でどんな役割を持たせることができるのか、そういったことを探りながらの研修期間となりました。私は、見守るということ意識して取り組んでみたのですが、どこまでが助けることで、どこからが介入なのかという線引きがとても難しく、もう少しできることがあったのではと悔いが残ります。しかし、全体を通して見ると、大学生という立場で平和学習ができたこともそうですが、グループの子達の積極的な学びの姿勢、より良いグループ間でのコミュニケーションの形成など、自分の成長にとって得るものが多かったように感じます。最後になりましたが、このような機会を与えてくださった方々、このプログラムを支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。

# 長崎派遣で実感した原爆の非人道性

平塚中等教育学校 4年 玉木 敦

自分は今回の派遣にて当時の被爆遺構の見学や、被爆者の方のお話を聞くことができ、とても有意義なものになりました。このようなことはなかなか経験させていただけるものではなく、自分はその機会を上手く活用することができたと感じました。

特に自分の中で印象に残っている場所は、長崎原爆資料館に併設される国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館でした。ここでは原爆により亡くなられた方の名簿や当時の写真が掲載されています。ここには水を求めながら亡くなった被爆者の方を弔うために、数多くの水のオブジェが設置されています。自分は修学旅行で訪れた広島でも似たような理由から水をささげるというイベントがあることを知っており、それだけ水を求めて苦しんだ被爆者の方が多かったのだと感じました。また、被爆者の方のお話や当時の資料などを見てみると広島、長崎ともに『水』に関するものがとても多かったことから、自分たちがいま、のどが渴いたからと自由に水を飲むことができるこの当たり前が素晴らしいものなのだと改めて気づかされました。そしてここに展示されている作品や被爆体験はどれも痛々しく生々しいものばかりで思わず目を背けたくなります。しかしこの現実を受け止め、理解することが平和のはじめの一歩になるのではないかと考えました。

今回の派遣では台風の影響により、行動が制限されることもありましたが多くのことを学ぶことができました。自分は今後被爆体験のお話をする方ができるようになっていくこの現状に対し、自分の周りの人に被爆者の方のお話や学んだこと、感じたことなどを共有していこうと思います。そして自分自身も今回の経験を活かし、原爆の非人道性を理解すると共に、平和に対する考えをさらに深めていこうと思います。

# 長崎の平和学習に参加して

高倉中学校2年 小田 紗穂子

私はこのプログラムに参加して、色々なことを考えさせられました。まず、1日目に訪れた城山小学校では、案内人の方からたくさんのお話を聞かせてもらいました。城山小学校の門の正面に、「少年平和像」という幼い少年が立っている像がありました。その像は平和を願って作られた像だそうです。現在城山小学校に通っている児童たちは、毎朝像の前で立ち止まり、平和への願いを込めて祈っているのだそうです。このようにたくさんの児童たちが戦争について学び、平和を願っているという現実を知り、私たちのような若い世代が、原爆や戦争について正しく知っていくことが重要だと感じました。

次に、2日目に訪れた原爆資料館では、ケロイドについて説明されている資料がありました。終戦後の学校では、ケロイドを持つ生徒に対してのいじめや差別があり、それによって自殺に追い込まれるほど精神的なダメージを受ける生徒が当時はたくさん居たそうです。案内人の方が言っていた「いろいろな物事を、よく考えながら見ていくことが大事」という言葉がとても印象的でした。また、同じく原爆資料館で、長崎は元々「70年間草木が生えることはない」と言われていたことを知りました。しかし原爆投下から78年、今長崎には草木が生え、建物は再建しています。このことを知って私は、過去のことを勉強するだけでなく、現代につながる「復興」や「その後を生きている人々」ということにも目を向けて、学んでいく必要があると思いました。

最後に、今回の平和学習をするにあたり「知る」世代から「知って伝える」世代へということを大切にしてきました。戦争について他人事のように捉えるのではなく、「もし自分や自分の家族が戦争によって犠牲になったら」と考えると、改めて戦争の怖さ、悲惨さがわかります。二度と同じ過ちを繰り返さない為に、私達は「知る」世代から「知って伝える」世代へ変わらなければならないと思いました。

# 被爆者の願いを未来へ

鵜沼中学校 1年 渡邊 怜奈

私は原爆について色々知っているつもりでした。ですが、現地に行かないと分からないことを知りたくてこの事業に参加しました。

実際に長崎へ行ってみると、思ったより沢山の発見がありました。特に印象的だったのは、原爆資料館です。資料館では、言葉で表すことが出来ないくらいの恐怖や不思議な感覚がありました。

一番衝撃的だったのは原子爆弾の模型です。私はそれを見て、このたった一発の原子爆弾が大勢の命、居場所を奪ったと思い、ゾクっとしました。また、その時に言っていたガイドさんの「まだ原爆について明らかになっていないことは沢山ある」という説明に驚きました。

他には、山口仙二さんや谷口稜暉さんの火傷やケロイドの写真が印象的でした。私はその痛々しい姿を見るべきなのか迷ってしまいました。ですが、「この人たちは見てほしくてここに展示したんだよ」という言葉を聞き、この方々の平和への願いや、思いの強さを感じました。

資料館以外にも浦上天主堂、山王神社、如己堂、城山小学校など長崎には想像していたよりもたくさん原爆について知れる場所がありました。そして、場所によって様々な歴史、原爆時のストーリー、そこにいた被爆者の思いなどがありました。全部行くことはできませんでしたが、私が行った場所、見た物は全て「長崎に来ないとわからなかった。」と思わせられるものばかりでした。もちろん、中には目を逸らしたくなるほど衝撃的なものもありました。ですが、衝撃的なものほど原爆の恐ろしさを教えてくれました。また、仲間と一緒に行くことで一人では気づけなかったこともたくさん知ることができました。

しかし、これで終わりではありません。これから私は、今回の経験をできるだけ多くの人に伝え、被爆者の「長崎を最後の被爆地に」という願いがずっと続いていくように努力し、今より平和な世界を作っていきたいと思いました。

# 「平和を未来につなごう」

湘南白百合学園小学校 5年 山本 美風

長崎では沢山の場所に行きましたが、特に私の心に残っている所は二か所です。

まず一つ目は旧城山国民学校です。核爆発の影響により焼け焦げてしまった建物が当時の状態で保存されています。私達と同じような年の子たちが楽しく通っていたであろう校舎が壊れ、沢山の児童が亡くなったという事実を知り、驚き、胸が苦しくなりました。実際に残った建物を見る事で本当に起きた事なのだとは強く感じる事が出来ました。

二つ目は平和追悼祈念館です。館内には水が流れているコーナーが沢山あります。それは原爆の爆発を受けた後、その熱さに多くの人がずっと水を求めて亡くなっていったので、水をたくさんためて犠牲者に捧げているからだそうです。とても綺麗でしたが悲しくなりました。亡くなった方々が得られなかった平和がこれから先も続くことを強く願いました。

私は今回長崎に行き、今まで知っていると思っていた核爆弾の被害やその被害者の想いはとても表面的な事だけだったと気付かされました。現地に行った事で、普通の暮らしをしていた人達にこんなにもひどい現実があった事を「感じる」事が出来ました。

これまで私は自分が住んでいる国でそんな悲惨な出来事があった事を考える機会がありませんでした。それは今日本が平和で、私達が今すぐに何かをしなくても身の危険がないからです。それはとても良い事ですが、それでこの先もこの平和は続くのでしょうか。

核の傘で守られている国は核抑止を止めている、という話がありました。日本は核爆弾で被害を受けたにも関わらず、核禁止条約に署名していません。核爆弾の恐ろしさを知る人が増えれば核に反対する人も増え、核への反対意識が高まり、日本の核禁止条約への署名につながり、それによって継続的な平和に一步近づけると思います。

私はこれからも長崎で学んだ平和への想いを沢山の友達に伝えていけるような人になりたいです。



# 長崎で知った原爆の怖さ

鵜洋小学校5年 和田 菜々香

「戦争に勝ちも負けもない。戦争はもうこりごりだ。」

長崎で被爆し、亡くなった永井隆さんの言葉がとても印象に残りました。戦争で亡くなっていった方、大切な人を亡くした方の悲しみや悔しさが伝わってきました。

原爆資料館では、原爆で黒くこげてしまった人の写真をたくさん見ました。とても怖くて辛かったです。また、長崎で被爆した谷口稜暉さんの真っ赤になった背中の写真も見ました。背中にひどいやけどを負い、仰向けにはなれず、うつ伏せになって目を閉じ、うめき声が聞こえてくるような写真でした。私だったら、絶対に耐えられないと思いました。

ピースフォーラムでは、原爆で大切なお母さんを亡くした方のお話を聞きました。戦時中は、「空襲の構え」、親指で耳を押さえ、残りの指と手のひらで目を隠し、地面に顔をつけて体を守るよう教えられていたそうです。お母さんは空襲の構えの状態です。黒焦げになり、亡くなっていたそうですが、手で隠していた為目が焦げずに残っていた事と、お母さんが、娘さんからのプレゼントのスカーフを首に巻いていた事から、お母さんと分かったそうです。とても残酷な話だなと思いました。

世界には今、約1万2,520発もの核兵器があるそうです。ピースフォーラムでは、同じ数のビービー弾を落とすのにどれぐらいの時間がかかるか、実際に落としてくれました。30秒以上、かなり長い時間、大量のビービー弾が落ち続けました。どれだけ多くの核兵器が世界にあるのか実感しました。これだけたくさんの核兵器をなくしていくのは、本当に大変だと思いました。

もう、核兵器は必要ありません。核兵器を作るのをやめて、地球温暖化の問題や、食糧危機の問題に目を向け、世界が協力して問題を解決していけたらよいと思いました。



## E 班

ユースリーダー 宮内 聡子  
鈴木 莉奈  
猪股 果穂  
関 玲依奈  
矢澤 治大  
安田 幸子



## 8年ぶりの長崎派遣で感じたこと

防衛医科大学校1年 宮内 聡子  
(コースリーダー)

私は小学5年生の時にこの平和学習に参加し、その時の班長さんのおかげで自分の考えを深められたので、今度は自分がそんな存在になりたいと思いコースリーダーに応募しました。

原爆資料館や平和公園で、班の子たちが調べてきたことや感想をたくさん伝えてくれて新しい見方や考え方に気づきました。ピースフォーラムでは原爆投下の日を音や光、大切なものを書いたカードを使って疑似体験をしました。空襲警報を聞きながら目と耳を塞いで伏せているときに、やっと戦争と原爆が実際に起きたことと理解できました。学校や家、家族の名前を書いたカードが回収されていき、当たり前を失うことを実感しました。会場が眩しい光で照らされた時、これが78年前なら次の瞬間には爆風で吹き飛ばされて全身にガラスが突き刺さり、がれきの下敷きになって動けないまま火が迫ってくるんだ、と思い恐ろしくなりました。原爆については、戦争を早く終わらせて結果的に多くの人を救った、核は抑止力である、という意見もあります。しかし、ウクライナ侵攻は核兵器がいつ使われてもおかしくないことを世界に示しました。抑止力といって我も我もと保有国が増えるほど核戦争が起きる確率は上がるのです。平和案内人の方は、長崎の原爆で核分裂を起こしたのは20%、広島は1%だと教えてくれました。たったそれだけであれだけの被害を与えたのです。現在、世界には1万2千発の核があります。そしてそれは78年の間に開発が進み、100%近くの核分裂を起こすようになっているかもしれません。

被爆体験講話をしてくれた築城さんは、核廃絶のためにできることはなにか、という質問に学んだことを周囲に広めることと教えてくれました。長崎で見たこと、聞いたこと、感じたことを友人や家族に伝え、それを連鎖させることが今回長崎派遣に参加した私たちの使命だと考えます。

# 私たちができること。

茅ヶ崎西浜高等学校 1年 鈴木 莉奈

昭和 20 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分。

ピカドンと、強烈な光と音で原子爆弾が長崎に落ちた。現代の私たちと同じように、皆家族がいて、友達がいて、恋人がいて、帰る家があって、そんな日常が一瞬で奪われた。

今回長崎を訪れて、そんな悲惨なことが起こったとは思えない、美しい風景だった今の長崎。そんな美しい今の長崎も、原子爆弾が落ちたと思うと苦しく、辛い気持ちになった。

私が 1 番長崎に行って印象的だった場所は原爆資料館だ。長崎の原爆資料館には、亡くなった人や動物の写真、熱線で焦げていた服や、衣類。同じく、熱線で骨とガラス瓶がくっついてしまっていたり、爆風によって吹き飛ばされたレンガや、キリストの銅像などを見て衝撃を受けた。私の中で言葉を失うほど、強烈な印象となった。原爆資料館に行って、どれだけの命が失われたのかを実感した。長崎に行き見学し、学ぶなかで、人間だけではなく、沢山の動物や植物も原子爆弾によって失われていることを改めて感じ、胸が苦しくなった。

長崎を最後の被爆地に。この言葉は、今年の平和祈念式典で長崎市長が言っていた言葉だ。今、ウクライナ侵攻があるように、世界では戦争をしている国がある。日本だけではなく、世界中に日本で何があったのか知らせていくことが大切だと思った。78 年前、美しかった長崎に原子爆弾が落とされ、沢山の命が失われて、後遺症で今も苦しんでいる方がいる。あまりの悲惨さに、その時の事を思い出したくないと言われる方も多いと聞いた。

昭和 20 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分で時が止まっている時計があったが、被爆された方達は、原爆が落ちた日の事を一生忘れる事は出来ない、心の傷はその時のまま、決して消えることはないのだろうと感じた。

そして、私達は、今ある日常に感謝して、これからも長崎や広島で何があったのか忘れずに、私達が語り継いでいく必要があると思う。いつか、戦争がなくなり、世界の人々が幸せだと心から思える日が来る事を願って。

# 伝える

湘南白百合学園中学校 1年 猪股 果穂

八月九日、この日は長崎に原爆が落とされた日です。

私が平和学習に参加したのは、原爆のことを上記の問いに対する答え程度しか知らず、原爆について詳しく知ってみたい。被曝した方々のことを平和学習を通して沢山学びたいと思ったからです。今回私は原爆が引き起こした沢山の悲劇を知りました。私が特に印象に残っているのは、当時原爆が投下される前も日常的に避難警報が鳴ることが状況であったこと、また城山小学校では二五〇人の生徒が卒業するはずだったにも関わらず、十四人しか卒業できなかったことです。国が始めた争いによって大切な友達を失うということは、今の私にはとても想像できません。しかし、この時私と同じ歳の子たちは避難警報に怯える日々を送り、そして何人もの友達を亡くしたのです。とても信じ難く、想像を絶することです。それもたった一瞬で。たった一発だけで。

平和学習のプログラムの中で、築城さんという被爆者の方のお話を聞くことができました。築城さんは原爆で全身に火傷を負いました。当時は、身体に神経が通っていないと思ったくらいだったそうです。治療も床でおこなっていて、どれだけ悲惨だったのか、見ていない私でも想像でき背筋が凍りました。私は、被爆者の方々の高齢化が進んでいる今、私たちが原爆についてより興味を持ち理解を深め、もっと様々な人に伝えていくべきだと考えます。未来に原爆の怖さを伝え続けなくてはいけないと思います。百年後も千年後も、二度と忘れることがないように。

今、ロシアによるウクライナ侵攻が行われており、もう一度原爆・核について考えるべき時であると思います。唯一の戦争被爆国である日本の行動を世界が見つめており、より多くの人々に原爆の実相を知ってもらうことが核を使わない世界への第一歩となると考えます。今回の平和学習で沢山の方々が教えてくれたこと・伝えてくれた思いを、私も周りの人達に伝えていきたいと思います。

## － 次世代へつなぐバトン －

湘南白百合学園中学校 1年 関 玲依奈

“台風接近・平和祈念式典は屋内開催・首相の参列見送り。”このニュースが舞い込んできたのは出発前夜。母の携帯への見知らぬ番号は市役所の方からの参加意向確認。参加すると威勢よく答えたものの、人一倍心配性な自分が邪魔をし、出発前夜は一睡もできず。

集合場所へ向かう車中、不安な自分を奮い立たせるために応募動機を読み返す。唯一の被爆国に生まれた者として、将来海外の人々に戦争や原爆の悲惨さを伝える役割を果たしたいという強い決意が記されていた。数か月前に自身の書いた言葉に勇気づけられ、台風が接近する長崎へ飛び立った。

一番印象に残ったのは、ピースフォーラムでの戦争の疑似体験。空襲警報、原爆の投下音は恐怖心も有り今でも耳から離れない。体験と事前に知っていた私と違い、何も知らされず被爆した方々の心身への負担は計り知れない。

台風の中で開催された平和祈念式典は現地出席ではなく、ホテルからネット中継を視聴。長崎市長から紹介された6年前に亡くなった被爆者の谷口さんの「過去の苦しみなど忘れられつつあるように見えます。私はその忘却を恐れます。忘却が新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れます」という言葉は画面を通じてではあったが、長崎での実体験も後押しし私の心に強く刺さった。

数か月前に書いた応募動機さえ忘れてしまうように、人の記憶は曖昧だ。新たな学びのために忘れる、そんな言い訳も谷口さんの重い言葉の前には通用しない。これまで被爆体験の“忘却”を全力で阻止してくれた語り部の方々も高齢化し、直接対話する機会は減っていくことだろう。私はこの長崎の地で見た被爆時計や山王神社の被爆クスノキなどの戦争の爪痕、そして先人から語り継がれた被爆体験というかけがえの無いバトンを携え、“次世代の語り部”として情報発信を続けていきたい。ここに記した決意表明がきっと未来の自分の原動力となるはず！

# 平和と戦争～ナガサキでの学び～

大鋸小学校6年 矢澤 治大

今回の長崎での平和学習は、台風接近のため平和祈念式典や二回目の青少年ピースフォーラムに参加することはできませんでした。しかし、台風が接近していたからこそ行えたこともあり、より有意義な平和学習となりました。

平和学習1日目、旧城山国民学校（被爆校舎）に移された、被爆した「カラスザンショウ」の木を見ました。ぼくは、その木を見て、人間がする戦争は、何も悪いことをしていない動物や植物もまきこまれてしまうのだと考えました。

平和学習2日目にセレモニーを行った長崎の爆心地周辺に自然がありました。78年前の8月9日、長崎では、動物や植物、人などの、多くの命が失われました。あれから78年後、長崎に自然があります。動物や自然が戦争にまきこまれたことを忘れてはいけないと思います。

青少年ピースフォーラムでは、平和の大切さと、戦争の恐ろしさや悲惨さについて学びました。このフォーラムで、被爆体験講話を下された築城昭平さんは、「仕事が忙しくて、勉強ができなかった。勉強がしたかった。」や「食事は、カボチャ1/3くらいだった。」などの事実を語られていました。その事実を聞いて、戦争が始まると、やりたいことができなくなったり、それまで当たり前だった日常が、壊されていくのだと思いました。

平和学習3日目の平和祈念式典（動画視聴）では、「長崎を最後の被爆地に」という合い言葉が、特に印象に残りました。分かりやすく平和を訴えられた気がしたからです。

平和学習4日目（最終日）は、稲佐山の中腹までバスで登り、長崎の街を眺めました。原爆が落とされる前人々は、どんな生活を送っていたのか気になりました。

世界を平和にするには、悲惨で恐ろしい戦争を繰り返さないためには、戦争体験者の思いや記憶を受け止め、伝えていくことが大切だと考えます。



# 心まで傷つける戦争

中里小学校 5年 安田 幸子

私は、戦争や原爆がとても怖かったのですが、ロシアとウクライナのニュースを見たり、日本が唯一の被爆国だということを知る中で、核兵器や戦争の恐ろしさを学ばなければいけないと強く思うようになり、参加しました。

長崎で訪れた原爆資料館や被爆者の方のお話を直接聞く中で特に印象に残ったのは、熱線や放射線による被害の大きさです。原爆の熱線は、ふつうの火傷では考えられないほどひどく、皮ふは一しゅんで溶けて焼けただれて、肉や骨が見えました。すさまじい爆風で人間は吹き飛ばされ、沢山のガラスや木片を全身に浴びました。目に見えない放射線は、知らないうちに体内に入って血を吐くなどの症状が出たり、時間が経つにつれ、白血病やがんになって亡くなる方がとても多いです。

とても怖かったけれど、これが七十八年前に実際にあった事なんだと思うと、生まれた時代が違うだけで自分にも起きうる事かも知れないと思い、ぞっとしました。

原爆死没者追悼平和祈念館にあった黒本には、白紙のものや「思い出したくありません」とだけ書かれたものもあると聞きました。戦争や原爆は、体の傷だけではなく、心も深く傷つけるものなんだと思いました。

行く前は、「知らない、よく分からない」怖さで、戦争は昔の出来事で、どこか他人事のように感じていました。でも、長崎で学んできた今は、知ったからこそその怖さがあります。みんな平和を望んでいるのに、「自分さえ良ければそれでいい」という心が戦争を始めるのだと私は思いました。

原爆が落とされてから七十八年が経って、語り部や被爆者が少なくなってきました。だからこそ、私達が知っていかなければいけないし、そこから伝える事もとても大事だと思いました。私にできる事は小さいけれど、平和への思いを大切にしていきます。



## F 班

ユースリーダー	大川	佳
	富田	樹香
	鈴木	舞奈
	愛敬	蒼琥
	中野	栞音
	溝上	あさひ



# ユースリーダーとしての感想と 学びの内容について

大川 佳  
(ユースリーダー)

今回私は、自身の平和学習を深めることに加え、これまでの参加経験を活かし小中高生の引率をすることを目標にユースリーダーに志願しました。この報告書では私が今回のプログラムで経験したこと、印象深かったことの一端を報告しようと思います。

まず、引率者としての活動についてです。ユースリーダーの活動として班ごとの話し合いの際、議長のような役割を担うことができました。派遣が完了し落ち着いて考えてみると、話し合いをした際の役回りは本当に良かったのか、と自問自答することがあります。あくまで「まとめ役」として、参加者たちを主役に話し合いを進められるよう心掛けてはいました。そういう意味では、平和学習に加えリーダーシップの学習にも有効なのではないかと思いました。

次に平和学習の内容として学んだことです。私は、個人的に平和学習は核を保有している国の若者たちにこそおこなうのが良いと考えています。このことについて考えていたところ、追悼祈念館で興味深い展示がありました。それは来館者の感想ノートでした。中を覗いてみると英語でのかきこみが多々見られました。このプログラムの参加前は外国人が日本に平和学習をしに来ることは珍しいと思っていましたが時期もあってか多くの外国の方が訪問していると知りました。このことで私は平和学習を意欲ある人間に広めていくことは可能であると考えました。

最後にこの報告書を読んでもくださった方々へ、私たちの学習報告会やこの報告書によって平和学習、ならびに長崎派遣プログラムへ興味関心を持っていただければ幸いです。

# 長崎派遣学習での学びと引き継ぎたいおもい

慶應義塾湘南藤沢高等部 2年 富田 樹香

プログラムの四日間は、私にとってとても貴重な経験でした。中でも、ガイドの方とのフィールドワークとピースフォーラムでの気づきは私にとって「平和」に対する考え方を見つめ直す機会となりました。

フィールドワークでは一本柱鳥居・山王神社の被爆クスノキ・原爆資料館という流れで被爆跡地、関連施設を訪れました。当事者の方が鳥居の足元の黒ずんだところを指し、「ここの名前を彫ってあるところが消えかかっているでしょ。これは原爆の熱線で剥離した跡なんだよ。」と教えてくださったり、クスノキの幹の深くえぐられた様子を解説してくださったりしました。長崎の現在の風景に、こんなにも生々しい原爆投下当時の凄惨さを感じる場所があったことに驚いたとともに、当事者の方の解説無くしては自分では気づけなかったであろう現存する原爆被害の実態に、原爆の記憶を風化させないよう被害を語り継ぐことの重要性を感じました。

ピースフォーラムでは、初めて被爆者御本人の口から、当時の様子を直接伺うことができました。実際に経験した方の話だからこそ、身近にあった風景や大切な人が一瞬にして失われてしまった無惨な様子が臨場感をもって伝わってきました。「核はたしかに、戦争を抑止する力を持っているかもしれない。しかし、被爆者としては、核の完全な廃絶を願ってやまないのです。」この言葉に、被爆者の方の思いが私の心に深く刺さり、託されたことの重みを痛感しました。また、同世代の学生の中には、平和について学習し、次世代へ戦争や原爆の記憶をつないでいこうと活動している方々がいることを知り、大変刺激になりました。

私は、プログラムの経験を元に、今後も平和に対する見聞を深め、様々な立場の人々の存在も理解しながら、ここ長崎や広島を風化させないで、社会に平和に対する関心の輪を広げていくために、少しでも役に立てるよう志していきたいと思います。

# もう二度と繰り返さないように

湘南白百合学園中学校2年 鈴木 舞奈

広島、長崎は原爆というたった一発の兵器で大切な物や人、全てを奪われました。そして今ロシアとウクライナでは戦争が起きています。私は改めて戦争の恐ろしさを考えるために平和学習に参加し、長崎へ行きました。

平和学習では、城山小学校や原爆資料館などを見学しました。私が特に印象に残っていることは、青少年ピースフォーラムでの「もしも今、日本に戦争があったら」という体験です。耳に残る空襲警報の音。自分の思い出の場所や大切な物がどんどんこわされていったり、大切な人が次々と消えていってしまい、私が「大切」と思っていたことが奪われていきました。当たり前だと思っていた日常が、戦争という出来事であつというまに消えていく怖さを実感しました。今までは戦争という事実しかみておらず、初めて自分と重ねるという体験をして、当たり前の日常の大切さを感じることができました。私が体験したのはほんの数分です。本物の戦争は何ヶ月も何年も、これよりもっと辛い事を感じなくてははいけません。失った命が返ってくることは一生ないです。そんな「尊い命」を一瞬で奪ってしまうのが戦争や原爆です。

「戦争は二度と繰り返してはいけない」と改めて感じました。しかし、地球上には一万以上の核兵器が眠っています。そして、核兵器があるかぎり、いつ使用されるかわかりません。核兵器を使用させないためにも、私たちが忘れないということ。また、次の世代へつないでいくということが大切なことだと思いました。今回長崎で学んだことを一人でも多くの人に伝えていき、平和の大切さ、戦争の恐ろしさを後世へ語り継いでいきたいです。

# 「平和のために出来ること」

明治中学校 1年 愛敬 蒼琥

小学三年生の授業で、僕は強い衝撃を受け、原爆の存在を知りました。原爆の本を沢山読み、実際に広島へ行きたいと思い、父をお願いをして広島へ向かったのが令和四年八月六日です。そして中学生になり、長崎の平和学習に参加するという貴重な経験を得たことで、深く考える学びとなりました。

長崎で被爆にあった城山小学校では、ここに通う千五百人もの児童が原爆投下によって一瞬にして命を奪われました。戦争に参加しない子ども達が犠牲にならざるを得ない理由は、いくら考えても僕には理解出来ません。

また、長崎の平和について学ぶピースフォーラムでは、被爆した方の体験を聞く機会を頂きました。実際の話は、とても詳しく、まるで原爆投下の時にそこに居たかのような感覚を味わい、恐ろしさや悲しみ、喪失感でいっぱいになり胸が苦しくなりました。

これらの体験から、被爆した方々の深い苦しきは、いくら学んでも僕にとっては想像でしかなく、実際に感じることは出来ない、簡単には考えられないものであり、だからこそ、戦争体験を語り継ぐことは絶対に必要なんだと強く感じました。

七十八年前、雲の影響で小倉から長崎に原爆が投下されたと言われています。もし、僕たちがいた令和五年八月九日のように長崎に台風が直撃していたらどうなっていたのでしょうか。元々少なかったとされていた燃料が無くなり、別な何処かで投下されていたかもしれないけれど、投下されなかった可能性を期待し、長崎を複雑な気持ちで過ごしました。

この先、被爆者の貴重なお話しが直接聞けなくなっていった時、風化されることだけは絶対に避けたいと思います。被爆した方々が今語ってくれていることは、絶対に忘れられないようにしなければならいのです。そのためにも、常に次の世代に学ぶ全てを僕は大切に伝えていきたいと思いました。

# 「平和への一歩」

大鋸小学校 5年 中野 栞音

私が平和学習長崎派遣プログラムに参加しようと思ったのは、自分が原爆について知りたかったのと、被爆体験などを聞き、学んだ事を家族や友人に伝えたいと思ったからです。

実際に行ってみて、印象に残ったことが大きく二つあります。

一つ目は、平和祈念式典で聞いた、亡くなった人の人数です。十九万六千六百七人と言う人数に最初は耳を疑いました。たった一発でそこまでの人達の尊い命が失われて残された人々に大きな心のキズを残して、それまでの日常が一瞬で変わってしまったということです。

二つ目は、青少年ピースフォーラムの築城さんの話です。築城さんは、当時十八歳で被爆し、原子爆弾が投下された時は、夜勤にそなえて友人と寝ていて、起きた時に外をみると昼のはずなのに、外は真っ暗でとなりで寝ていた友人を見ると、体がヤケドで真っ赤になっていて、自分の事も見ると真っ赤になっていたそうです。もし、私が築城さんの立場だったと思うと、とてもおそろしいと思いました。

その他にも、原爆資料館に行って原爆の悲惨さを語る写真や、絵を見て回り、当時の様子を肌で感じる事ができたことはとても良い体験になりました。一つ残念だった事は、台風6号の影響で屋内開催となってしまう、平和記念式典へ直接の参加が出来なかったことです。でも、ライブ中継で式典の様子を見れて良かったです。

私は、今回、平和学習長崎派遣プログラムに参加して、被爆者の方の話や原爆資料館などに行って学んだ事を戦争について知らない人達に広く伝えていけたらいいなと思います。また、それが平和への一歩につながると私は思います。



# 「原爆を落とされた街・長崎」で学んだこと

石川小学校5年 溝上 あさひ

私は、夏休みに藤沢市で行われた平和学習長崎派遣プログラムに参加させていただきました。その中で、私の心に残った体験は次の二つです。

まず一つ目は、長崎派遣一日目、八月七日に行われた、城山小学校見学です。城山小学校は、爆心地に最も近い場所にあった国民学校です。家庭にいた児童、教師のほか、城山小学校で働いていた人々、合わせて約千五百名の方が亡くなりました。その被爆者の中に林嘉代子さんという方がいました。林嘉代子さんの母、林津恵さんが嘉代子さんの冥福を祈り学校に寄付した桜が嘉代子桜です。嘉代子桜の横に「三つの願い」というモニュメントがあります。このモニュメントは、城山小学校の生徒たちから募った、平和に向けた三つの願い「大きな希望」、「広い心」、「深い愛」を、三つの輪で表現したものです。

二つ目は、長崎派遣二日目、八月八日に行われた、ピースフォーラムでの被爆体験講話です。講話をしてくださった築城昭平さんは十八歳の頃、爆心地から一・八キロの学校の寮で被爆しました。当時は学徒動員により軍需工場で働いていたそうです。勉強はもちろん、食事も少しのかぼちゃと芋でかさ増しした粥など粗末なものだった、と聞きました。轟音が鳴り響き、しばらくして辺りを見渡すと、目の前には地獄が広がっていたそうです。たとえ生き残っても放射能は被爆者の方々をむしばみ続け、「いつ死ぬのか」という恐怖が消えることはなかったそうです。

長崎は、爆弾を落とされる予定がなかったのに、落とされた、横浜も候補に入っていた、と知り、とても驚きました。藤沢市もその被害を受けていたのかもしれない、と考えると、とても身近な問題なのだ、と、思いました。「平和とは何か。」という気持ちを、私は忘れずに、これから生きていきたいと思えます。



## 広島引率者（久保 光輝）

広島派遣で出会った2人の方が、深く心に残っています。1人目は被爆者の梶矢文昭さん。次々と語られる被爆の惨状に、派遣者がメモを取ることも忘れて聞き入る姿が印象的でした。

そして、戦前の写真のカラー化から、原爆が投下される前の広島の記憶を伝える庭田杏珠さん。庭田さんは、派遣者とも年が近い大学生でした。戦争体験を聞く機会が年々減る中、これからは若者が戦争の記憶を伝えていく必要があります。

派遣者の方々が今後、広島で見聞きしたことを藤沢で伝えていってくださることを願っています。私も広島で生まれ育ち、平和教育を受けてきた経験を、第二の故郷・藤沢に伝えられるように、これからも活動していきます。

## 長崎引率者（米田 ステファニー 咲笑）

中学2年生と高校3年生の時に長崎派遣に参加させていただきましたが、今回は引率者として参加し、また別の視点で平和について考えることができました。新たにユースリーダーが加わったことによって、小学生から大学生までの幅広い年齢層の人が一緒に平和について考えて話し合い、派遣者一人一人の平和に対する認識がより深まったのではないかと思います。今後も派遣者には意見交流などを通して価値観をアップデートして行ってほしいです。また、今回学んだことや考えたことを次のステップに移すことも大切です。私はその一環で平和の輪を広げる実行委員会に加入しました。皆さんの平和の「形」を見ることができると楽しみにしています！

# 記録写真集



# 事前学習



# 広島派遣













# 長崎派遣











